

カオハガン島の出会い

人間福祉学部 福祉心理学科 4年

3月8日～3月13日までフィリピンのカオハガン島に行き、暮らし、人柄、表現の仕方、考え方、生き方について学びを深めることができた。

私のカオハガン島に行く理由は大きく3つある。1つ目は、初めてカオハガン島の写真を見たとき、綺麗な海と自然豊かな緑に魅力を感じ、おもわずその写真を手に取り、ずっと眺めていた。また、そこに住んでいる島民が自然と共に生きる暮らし方や子どもたちの輝かしい表情に心打たれ、自分の目でカオハガン島や島民の様子を見たいと感じた。それは、1年前のことで時間やお金がなく、カオハガン島研修に参加することに悩んでいたが、両親と相談し参加を決意した。2つ目は、カオハガン島で生活を送っている崎山さんに興味があった。どのような経緯で購入したのか、カオハガン島に対してどのような思いがあり暮らしているのか、崎山さんとカオハガン島の歩みを知りたかった。そして、3つ目は新学期から教員として学校で働くが、その前にたくさんの人の思想や価値観に触れ、異文化を学ぶことで人として成長したいと感じた。今まで、カンボジアやインドに行き、異文化交流やボランティアに参加してきたが、全てのことが新鮮で生活スタイルも日本と異なっていた。カオハガン島での学びも日本とまた違うものではないかと感じ、機会があれば私が感じたカオハガン島について、日本の子どもたちに伝えていきたいと思った。カオハガン島に行く前から、オフィシャルサイトや本を読んで想像を膨らませとても楽しみにしていた。



カオハガン島に到着するまでの間、飛行機や船に乗り長い時間をかけ移動した。セブ島からカオハガン島に向かう船では、初めて美しい水色の海を見て、わくわくした気持ちでいっぱいになった。カオハガン島に到着してからは、すぐに子どもたちに出会い、お花をプレゼントしてくれた。それは、子どもたちにとってできる限りのおもてなしであり、とても嬉しかった。オリエンテーションを終えた後は、カオハガン島を1周まわり散策した。風が気持ちよく、道がないところを自由に歩き、島民と動物(豚、鶏、犬)など共生した生

活風景や小さなお店、小学校、教会を見た。島を1周歩くのに約20分しか時間がかからず、驚きと不思議な感覚に陥った。ココナッツオイル作りでは、削る、搾る、煮る、こす、ビン詰めと作業が多く時間をかけて行った。1個のココナッツから少量のオイルしかとれず、手間暇だけではなくとても貴重のものであると感じた。



今回私が知りたい事の一つであった崎山さんとカオハガン島の歩みについて話を聞く事が出来た。崎山さんは、52歳の時に仕事を辞めフィリピンに来た。そこで出会った方にカオハガン島を紹介され、海や島が大好きな崎山さんは”Fall in love”恋に落ちてしまったとおっしゃっていた。私はその言葉を聞き、心が熱くなった。カオハガン島の自然の環境、島民の豊かな暮らしの環境を守っていきたいという思いと子どもたちのキラキラした笑顔がこの先将来も続くように教育が必要であることを崎山さんから聞き、カオハガン島への愛情を強く感じた。

また、子どもは幼いころから親の手伝いを行い、15歳になると自分の身の回りのことは全てできるようになるとおっしゃっていた。一人で一生生活できる能力を持てることに驚き、また島民のしっかりした姿を見て学ぶことが沢山あった。病気や終末期を迎える方についての看病・支援については、深く考えさせられた。日本は、平均寿命を伸ばすために如何に健康に過ごせるか自身の健康の保持増進に努める。また、日本の医療は時代と共に発展しており、健康に対して意識を高く持っている。しかし、カオハガン島は、島民みんなが看病・支援を行うことで、自分の好きな土地で、そばに誰かがいる幸せを感じながら一生を終えることができると学んだ。



小学校では、高学年の児童に授業を行い、笑顔溢れる児童に囲まれながら大切な時間を過ごすことができた。始めに自己紹介を終えた後、児童はすぐに私の名前を覚えてくれ、名前がたくさん呼んでくれたことが嬉しかった。私たちは、カオハガン島の児童に対し日本で昔から遊ばれている玩具として万華鏡を紹介し、児童と一緒に作ったりした。児童は、ビー玉や筒を手に取りテープで貼ることや筒の表面に好きなものを自由に描いてもらう作業をした。カラフルな色使いで果物や魚、自分や親の顔、花を友達と話しながら描く児童、描いている絵を見られるのが恥ずかしくて隠しながら描く児童、私たちに好きなものを教えてくれる児童、絵を描くことに集中している児童、大笑いしながら描く児童など一人ひとり個性があり、どの表情もキラキラして素敵だった。完成した後は自分で作った万華鏡を持ち、友達顔、洋服、葉っぱ、土、海を見た。普段見ている景色をまた違う見方で眺めることができたのではないかと感じた。その万華鏡を持って笑っている姿を見て、教えることの必要性はこのためにあるのだと改めて教育の大切さも学ぶことができた。そして、児童からはカオハガン島の遊びを教えてもらった。カオハガン島のかけっこやドッジボール、ジャンケンの仕方など教えてもらい、とても盛り上がった。そして、たくさんの笑顔を見ることができた。私も全力で走り回った結果、サンダルを脱ぎ捨て服を汚しながら児童と向き合い交流した。



節水・節電の生活については、最初慣れるまで少し大変だったが、日数を経ることで日常化してきた。雨水は冷たく、少量ではあったが日本では経験できないことであり、水の大切さを感じた。日本は、お風呂に入浴することも蛇口をひねって水を使用することも普段の生活で当たり前のことで気に留めないが、当たり前ではないことに気づいた。また、暗くなるとランプや懐中電灯を使って生活を送った。

自給自足の生活とは、その日食べる分だけ収穫するという暮らしである。魚やウニ、蟹を海に潜って取りに行き、豚を屠殺して食べるような光景が見られた。子どもたちも海に潜り魚を取りに行く。豚の屠殺も子どもたちはしっかりと見て、その豚を食べる。私は、生きるために命を頂いていることに気づき、食べ物に感謝の気持ちが込み上げてきた。普

段スーパーやコンビニで食べ物を買って食べてしまうが、利便性が良いことだけでないと感じた。「いただきます。」「ご馳走様。」とあいさつをするだけでもとても大切なことである。

最後にホームステイでは、一人ずつ一家に行き現地の暮らしを学んだ。私は優しい父と学校の先生をしている母、3人の元気な子どもたちの家に訪問した。ホームステイの前日から緊張とワクワクした気持ちで胸がいっぱいになりとても楽しみだった。当日、初めて会ったとき父から素敵な笑顔と温かい言葉から一気に安心感へと変わった。子どもたちは、「名前は?」と声をかけてくれたり、手を引っ張って「こっちこっち!」とエスコートしてくれたりしてとても嬉しかった。父からは、カオハガンスタイルの家事や掃除の仕方を教えてもらった。特に料理では、米を研ぐ時もヌードルを茹でるときも子どもたちが覗いてきて、目があうとにっこり笑ったり、手伝ってくれたり楽しく料理をした。掃除は、ココ椰子の枝葉の箒で砂やほこりを掃き、雑巾がけもした。昼食後は、親戚や近所の子どもたちと一緒にお話をしたり遊んだりした。私のつたない英語に耳を傾けてくれて最後まで話を聞いてくれた。島民たちは簡単な英語やジェスチャーを使い、分かりやすいように説明してくれたり、優しく接してくれた。その後も子どもたちと海に行き釣りをしたり、泳いだり、砂辺に行ってだるまさん転んだやかけっこをして全力で遊んだ。家では、お菓子を食べたり、絵を描いたり、パズルをしたり、ダンスをしたり、一緒に過ごした。夕方、子どもたちと手をつなぎ散歩をすると、近所の友達が挨拶をしてくれたり、名前を笑顔で呼んでくれた。「また明日ね!」と子どもたちが声をかけてくれるので、まるでずっとカオハガン島に住んでいたかのような感覚に陥った。言葉では表すのが難しいが、本当に幸せな気持ちでいっぱいだ。夜になり、お別れの挨拶の時、もっと一緒に居たくて寂しい気持ちと感謝の気持ちが混合し涙が溢れた。父母が私にメッセージを伝えてくれ、子どもたちからはネックレスやブレスレットをプレゼントしてくれた。私を温かい心で迎えてくれたホストファミリーのこと一生忘れません。また、必ず会いに行こうと決めた。



研修を終えて、カオハガン島から得たことは自分が大切にしたいと思う気持ちを持ち続けることが重要であると気づいた。それは、人、動物、自然など感謝する豊かな心にも繋がると感じた。シンプルなことだけでも、生きていくうえで最も大切なことである。文

化や言葉が違っていても通じ合うことがたくさんある。この気持ちを忘れずに生きていきたい。また、今回学んだことを日本の私の家族、友達、周囲の人に伝えていきたいと思う。崎山さんのお話で” Fall in love” 恋に落ちてしまったとおっしゃっていたことを私もその言葉の通りカオハガン島に” Fall in love” 恋に落ちた。またカオハガン島に行き、カオハガン島のことを深く深く学びたいと感じた。最後にカオハガン島に行くことを決意した過去の自分や家族、周囲の人、関わった全ての方に感謝している。